

幕末混乱期の小松



安政5年(1858)「御巡見御道筋手絵図」(金沢市立玉川図書館所蔵) 安宅の海岸沿いに大砲を据え付ける「御台場」の縄張所が2か所あるのがわかる。別図(安宅町図)ではこの地の場所を「真甲山」と記している。

十八世紀末以降、日本の沿岸には交易を求め諸外国の船が出没するようになっていた。幕府や諸藩では海岸防備(海防)の強化をはかり、加賀藩でも文化四年(一八〇七)に十二代藩主斉広の命によって軍勢・船・武器等の準備が進められ、小松・安宅町でも町下代・町附足軽等が異国船漂着時の御手当御用に命じられている。嘉永期(一八四八〜五三)にな

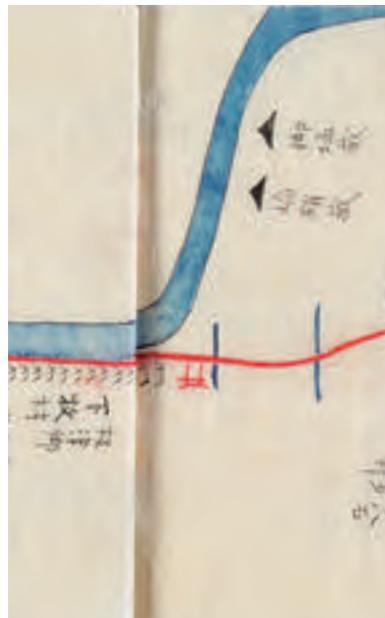
ると能登沖で度々異国船が発見されるようになり、その情報は小松町奉行や能美郡十村(とむら)にまで伝えられていた。安政六年(一八五九)六月には安宅浦にも異国船が到来し、小松町が大変な騒ぎになっている様子が当時の記録から

文久3年異国船渡来時の能美郡役付

役名	人名
浦方駆廻り取縮(縮)方	牧野孫七
	犬丸村啓太郎
	御直支配長谷村左源次
安宅新村	御直支配赤井村藤作
	石黒源三郎
安宅御蔵詰 寄人夫才許	埴田村三郎兵衛
	三坂村孫市
御郡御奉行所附	寺井村平吉
	北村与十郎
	石黒源三郎倅源右衛門
御役所詰	釜清水村次三郎
	来丸村文三郎
御郡村々耕作勢子方 火の用心等取縮(縮)方 駆廻り御用	釜清水村次三郎倅啓作
	来丸村豊作
	今江村庄吉郎

文久3年(1863)「海防御手当方二付窺帳」(石黒家所蔵)より作成

窺える。また小松の海防施設として、嘉永三年（一八五〇）、前田主馬により安宅新村へ御台場の縄張が命じられている。



嘉永六年（一八五三）のペリー来航以降、藩は町や村の庶民に動揺を戒める通達を出す一方、さらなる海防強化のため金銭的・人的な負担を増加させた。小松では、大砲鑄造のための冥加銀の上納、異国船渡来時に安宅新村の御台場や安宅浦の御蔵所へ人夫各三〇〇人の動員などが課せられている。文久三年（一八六三）四月になると、農民の鉄砲稽古・銃卒取立てがはじまり、異国船渡来・上陸時の組織編成や兵糧の手配等について具体的な取り決めがなされた。元治元年（一八六四）十二月時点の能美郡の銃卒は、四隊編成

で計一四人であった。

このように開国とそ

れに伴う政治・社会的

変化は、庶

民の身の回

りの生活に

も影響を及

ぼし、その

ことは彼ら

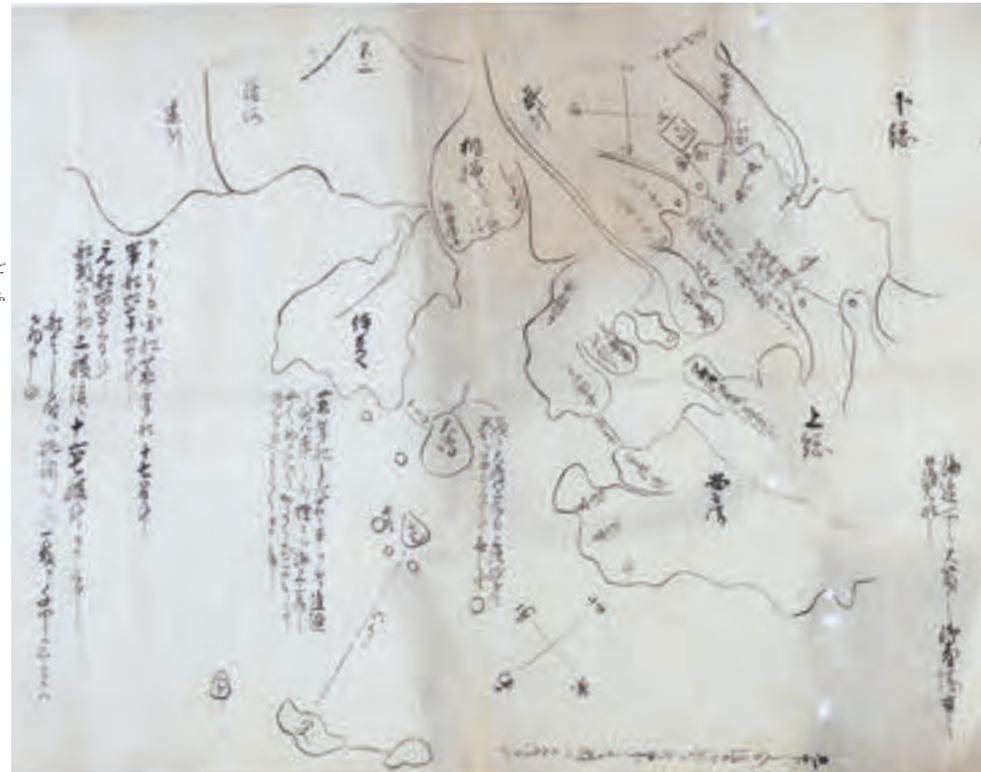
の中で全国

的な政治・

社会情勢に

対する関心を

生み出した。中でも御扶



年未詳「アメリカ船来航江戸湾艦絵図」（関戸信次氏所蔵） アメリカ船来航時の江戸湾海防の様子を描いている。房総半島を会津・忍藩が、三浦半島を彦根藩が守備している。

持人十村を勤めた石黒家では、天保八年（一八三七）大塩平八郎の乱以降、

禁門の変、長州征討、戊辰戦争など幕末の政治情勢に関する多くの情報を収集していた。（堀井美里）